



Title	接続詞スルトについて : 命題レベル/判断・発話レベルの観点から
Author(s)	本多, 真紀子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1998, 32, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56517
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

接続詞スルトについて

— 命題レベル／判断・発話レベルの観点から —

本 多 真 紀 子

キーワード：接続のレベル 認知的不確定性 継起性 同一場面性 思考内容の展開

1. はじめに

接続詞スルトに2つの用法の区別があることは従来からしばしば指摘され、これらを「確定条件用法」「假定条件用法」と呼ぶ論者もあった。しかし、この2つの用法の差異は、条件の「確定」「假定」という、条件形式の用法の伝統的な分類法によって規定しきれるものではなく、接続のレベルが異なるものとしなければ有効な分析とならないのではないか、というのが本稿のとる観点である。接続のレベルという概念は、現代日本語接続詞のさまざまな個別形式を分析していくにあたっても有益なものであると考えられる。以下では、スルトの用法・機能についての記述を行った後に、この接続レベルについて考察し、これをスルトの各用法に適用する。

なお、本稿でいう現代日本語の「接続詞」とは、「無標の位置が文頭・節頭である接続表現」を指し、複合形式も排除しない。また、本稿では接続詞が文頭に生起し、接続対象がその前後の2文である場合を主な考察対象とする。さらに、接続詞を含む文の直前の文を前文、接続詞を含む文のうち接続詞自体を除く部分を後文と呼ぶこととする。

2. 先行研究

現代日本語接続詞の分類や用法記述を行った文献中には、スルトを単一の分類範疇に入れるものと、佐治（1970）、森田（1980）、田中（1984）の

ように用法を二分するものがある。用法記述を伴う研究は、ほぼすべて二分の方針をとる。たとえば森田（1980）は、次のように記述している。

- (1) a. 確定条件 前述の内容が実現したことを傍観して、そのときその場で生じた事態を以下で述べる。

「終了のベルが鳴った。すると急にあたりが騒がしくなった」

- b. 仮定条件 “もし……たのなら”の意を表す。“もし、それが本当だとすると……”の意識である。

「僕は今までずっと勉強していたんだよ/するとお前はまだお八つを食べていないんだね」

スルトの用法を、古典文法における条件形式の用法分類にならって「確定」と「仮定」に分ける見方は、佐治（1970）にも共通している。

田中（1984）は「前件の直後に引き続いて起こる事象を」結び付ける用法と、「前件から必然的に無理なく導かれる事象を結び付ける用法」に言及している。この2用法は、それぞれ森田（1980）の「確定条件」「仮定条件」の用法に対応している。

このように従来から、接続詞の記述的研究は、スルトが異なる2つの用法を持つことを明らかにしている。しかし、次に問題となるのは、この2つの用法がどのような関係を持っているのか、ということである。また、各用法の精密な記述という観点からも、いくつかの不十分点が残されていると考える。本稿では、以下、この2つの問題意識によって考察を行う。

3. スルトの2用法

3. 1 2用法の分類基準

まず、スルトの用法分類の基準を、前・後文の意味的關係を大きく変更することなくダトスルトに置換できるかどうかという点におき、置換不可能なものをスルト1、置換可能なものをスルト2とする。

(2) 勇が昼食をつくった。すると彩はそれを食べた。 <スルト1>

(3) 勇が昼食をつくったらしい。すると彩はそれを食べたのだらう。

<スルト2>

(2) *勇が昼食をつくった。だとすると彩はそれを食べた。

(3) 勇が昼食をつくったらしい。だとすると彩はそれを食べたのだらう。

スルト1は森田(1980)の「確定条件」用法を中心とするものであり、スルト2は「仮定条件」用法に相当する。

3. 2 スルト1

スルト1は前文事象をそれに引き続いて起こる事象と関係づける用法であり、接続助詞～とのいわゆる事実的用法との間にかなりの平行性を持つ。前田(1996)は、それ以前の条件表現研究をふまえ、接続助詞～の事実的用法について、主として統語論的な観点から次のように分類している。

- (4) ① 連続 (Aは～すると～した。) …同一主体の連続する動作を表す。
 ② きっかけ (Aが～するとBが～した。) …異主体の連続する動作を表す。
 ③ 発現 (Aが～しているとBが～した。)
 … 前件の状態の最中に後件の動作・事態が発生する関係を表す。
 ④ 発見 (Aが～するとBが～していた。)
 … 前件の動作 (主に視覚的動作) によって後件の状態を発見する。
 ⑤ 時 (前件=～になると・～がたつとetc.) …前件が時の経過を表す。

これを参考にして、スルト1の用法を次のように分類する。この分類においては、下位用法の名称を一部変更し、また「時」の用法をたてず、実例観察によって発見した「並行」の用法を新たにたてた。

①同一主体・連続：(Aは～した。すると～した。)

(5) 婆さんはロシア人の間抜けさがおかしくなってきた。すると気の緩みも手

伝って、思わずくすくすと声を出してしまった。(半田善之「鶏騒動」)

この下位用法については、前・後文の命題内容が同一主体の意志的行為をあらわす場合、スルトによる接続がしにくいという制約がある。これは接続助詞～トの用法との相違点である。

(6) 彩は答案を出すと教室を出ていった。

(7) ??彩は答案を出した。すると (彩は) 教室を出ていった。

②異主体・連続：(Aが～した。するとBが～した。)

(8) 伊佐は、ミチ子のいう通りかも知れないと思った。するとミチ子は急に伊佐の耳もとに何か囁いた。(小島信夫「アメリカン・スクール」)

①②では、前・後文事象の間に因果関係が認められやすい場合が多いが、(8)に見られるように、これは義務的なものではない。②の用法にかかる制約については後述する。

③発見：(Aが～した。するとBが～していた。)

(9) 手当てのために家にもう一度もどった。すると医者^が来ていて、巨大な注射器で父の太腿に注射を打っていた。(三木卓「鷗」)

前文命題には発見を導く具体的動作が来て、後文命題には発見された事物の状態が示される。発見の主体は前文主体が多いが、言語表現発信者の視点が置かれ、前文主体とともに発見を行うことができる他の人物、または発信者自身でもよい。前文述語は「見る」等の視覚動詞、「行く」等の移動動詞、「考える」等の思考動詞等からなる(豊田1978、前田1996参照)。

④発現：(Aが～していた。すると(Bが)～した。)

(10) もうこれで終りだ。引揚げる潮時だと思いながら兄と少年はまだそこにしゃがんでいた。すると気味の悪い声で女が歌っている外国の古レコードが一

枚売れた。(三木卓「鱗」)

前文命題には継続中の動作がきて、その最中に起こった一回性の事象を後文命題があらわす場合である(鈴木1986、前田1996参照)。

⑤並行：(Aが～していた。すると(Bが)～していた。)

- (11) 魚崎はすこし早目に寺に着いたので、墓地のなかをのんびり散歩していたのである(「勤めがなくなると、どうしても運動不足になるからね。いい機会だと思って」)。すると、墓石と卒塔婆の列の向うを、同じように散歩している二人づれの女がいる。(丸谷才一「年の残り」)

この用法の実例は稀である。前文主体による動きの継続中に後文事象が発見される場合で、発見の主体は前文主体が多い。意味的に「③発見」との共通性があり、直接の発見行為が言語化されていないものと見られる。

- (11') 魚崎は墓地のなかを散歩していた。[彼はふと向こうを見た。] すると、二人づれの女がいる。

③～⑤の前文または後文の「～していた」は、動き動詞の継続相述語を表すが、状態性述語(名詞述語・形容詞述語・状態動詞述語・動き動詞否定形述語)もそれぞれこの位置に生起することができる。

先に①の用法について、同一主体の意志的行為の連続、つまり同一動作主の場合にはスルトによる接続がしにくいと述べたが、この制約は後文命題の表す事象が意外性をもって捉えられる場合に緩和される。¹⁾

- (12) ??太郎は帽子をぬいだ。するとそれを机の上に置いた。
 (13) ? 太郎は帽子をぬいだ。するとそれを食いちぎった。
 (14) 太郎は帽子をぬいだ。すると意外にもそれを机の上に置いた。
 (15) 太郎は帽子をぬいだ。すると意外にもそれを食いちぎった。

意外であると捉えられやすい(13)の事象連鎖は、捉えられにくい(12)よりも

接続の許容度が上がる。そして、意外性を明示する表現を後文に加えた(14)(15)は、ともに許容度がさらに高くなる。これらは、スルトの前・後文にかかる制約が、実は同一動作主の制限そのものではなく、他の側面から分析されなければならないものであることを示唆している。

ここで、非同一致動作主の場合、特に「②異主体・連続」の場合を考えてみよう。②においても、次のような制約が見られる。

(16) 5 8 2 9 と 6 0 7 2 を足した。すると結果は 1 1 9 0 1 になった。

(17) ?? 1 と 1 を足した。すると結果は 2 になった。

(17)では、計算行為の動作主が正常な大人であり、通常の算術的計算が行われているという無標的文脈にあるかぎり、スルトによる接続は不自然である。ところが(16)は、同じ文脈において全く不自然ではない。無標的文脈において不自然な例文には(18)のようなものもある。

(18) ?? 勇の父が死んだ。すると家族は葬式を出した。

(17)(18)と同じ文連鎖をソシテで接続した(19)(20)と比較してみると、(19)(20)にはそれらのような不自然さがない。

(19) 1 と 1 を足した。そして結果は 2 になった。

(20) 勇の父が死んだ。そして家族は葬式を出した。

ここから考えられるのは、言語表現の受信者が前文に接したとき、その後の場面展開として後文事象を確定的に予期すると発信者が捉える場合には、スルトによる接続ができないということである。後文命題内容が一般的・客観主義的に見れば当然・必然の事象であっても、確定的な展開予期が成立しにくいと捉えられた場合には、スルトの使用が可能である。

(21) 夜が明けた。するとあたりが明るくなった。

(21)の前・後文事象は、一般的には当然の事象連鎖であるが、前文事象に続く場面展開としてこの後文事象が想定・選択されることは少ないと考えられる。すなわち、「夜が明けた」に続く展開として想定される事象は非

常に多くの可能性を持っており、かえって「あたりが明るくなった」といった事象への展開は受信者によって予期されにくいのである。このような事象展開の非予期性を「認知的不確定性」と呼んで、一般的・客観主義的な観点からの事象継起の「偶然性」と区別することにする。

先に見た①の同一動作主接続制限も、この「認知的不確定性」によって説明できる。Hasegawa (1996) は、現代日本語の接続助詞～テによる接続に関する分析の中で次のようなことを述べている。同じ人間が複文の2つの節において動作主的に参与している場合、聞き手はその2つの行為がなんらかの意志的な関係性を持つものと期待する。この場合の2節には、因果関係、行為の理由と行為といった非偶然的 nonincidental な関係に捉えられる2節と同様に、テによって接続される資格が与えられる、とする。

この見解によれば、同一動作主を持って連鎖する2命題の内容は、人間の認知において偶然的関係にあるとは捉えられにくく、本稿でいう認知的不確定性も認められにくいと考えられる。これがスルトの同一動作主接続制限を起因していると思われる。

また一方で、後文事象が前文事象からの展開として意外なことがらだと捉えられていたり、意外性を明示されたことがらであったりする場合、「認知的不確定性」の一下位類である「意外性」は、同一動作主2命題の内容間の関係の非偶然的認知をキャンセルする力を持つと考えられる。

以上のように、①②の接続制限については「認知的不確定性」によって整合的な説明ができるが、これは③～⑤にも適用できる説明である。「③発見」「⑤並行」においては、前文の行為が後文の状態の発見を起因するといった因果関係を想定されるものであるが、何が発見されるかを受信者が前文受信時に確定することはできない。次のように、発見が確定的に予期される事物について「発見」が行われる場合は、不適格な文連鎖となる。

② *彩は角を商店街の方へ曲がった。するとそこに商店街があった。

「④発現」は前文事象の継続中に新たなできごととして後文事象が生起する関係を表すものであり、後文事象は本来的に、あらかじめ展開として確定することが不可能な事象でなければならない。

(23) *勇は彩が近づいてくるのを見ながら遊んでいた。すると彩が来た。

スルト1に「認知的不確定性」の表示機能が存在するということは、この接続詞が、他の多くの接続詞とは異なり、受信者に対して前文受信時に後文の内容予測を絞り込ませる機能を持たず、逆に、確定的に予期されるような事象の生起・知覚が後文に現れないことを示す機能を持つということである。他の多くの接続詞は、たとえばダカラ（因果関係性・換言性など）、ソシテ（対等性）、シカシ（逆関係性・予測裏切り性）など、後文に対する受信者の予測範囲を絞り込ませる機能を持っていると思われる。

スルト1のその他の機能としては「継起性」および「同一場面性」の表示がある。「継起性」表示機能は、前述の田中（1984）などに指摘があるほか、接続助詞～トの機能としては従来からあげられてきた。「前件の直後に引き続いて起こる事象」（田中1984）が後文命題内容となるのが通常であるが、発信者が前文事象に引き続いて起こる事象として後文事象を捉えて述べているかぎり、次のような文連鎖も不可能ではない。

(24) 勇は沼に拳銃を捨てた。すると1年後に彩がそれを見つけた。

スルトについて、①～⑤の下位用法に即してその継起性のあり方をまとめれば、先行－後続関係にあるのはそれぞれ次のようなことがらである。

(25)	<先行>	<後続>
①同一主体・連続	前文事象の生起	後文事象の生起
②異主体・連続	前文事象の生起	後文事象の生起
③発見	前文事象の生起	後文事象の知覚
④発現	前文事象の継続	後文事象の生起

⑤並行 : 前文事象の継続 — 後文事象の知覚

③⑤において後続するのは後文事象の「知覚」であって「生起」ではない。また、④⑤は前文事象の継続中に後文事象が生起または知覚されるものであり、通常は「継起」とされない関係であるが、ここでは、前文事象の継続期間の少なくとも一部分が後文事象の生起・知覚に先行するという点において、広義「継起」としての共通性を認めてよいものと思われる。

「同一場面性」も接続助詞～トについて指摘されてきたが（久野1973、蓮沼1993など）、スルトもまた前・後文内容にこの性質を付与する（森田1980参照）。たとえば「②異主体・連続」に属する次の例文は、彩が電話などによって勇の到着を知ったという文脈があるか、または日本を俯瞰する視点から述べられているのでなければ、適格な文連鎖ではない。

(26) 勇は大阪に着いた。すると彩は東京を出発した。

また、「③発見」(27)、「④発現」(28)、「⑤並行」(29)では、上のような2事象の生起場面の相違が許容されない。

(27) *勇は大阪駅の前で道を曲がった。すると東京駅の前に銀行があった。

(28) *勇は大阪駅の前で遊んでいた。すると東京駅の前に彩が現れた。

(29) *勇は大阪駅の前を歩いていた。すると東京駅の前で彩が遊んでいた。

3. 3 スルト1の前・後文の条件化

以上の考察は、スルト1の前・後文命題部分の述語がともに過去形（タ形および歴史的現在のル形）の場合を対象としていたが、前・後文命題部分の述語が非過去形（歴史的現在以外のル形）の場合には、前・後文の内容間に条件関係が発生する。この現象は、田中（1984）にも言及がある。

(30) 勉強の嫌いな子供がいる。すると勉強の嫌いなのは教え方が下手だからという原因が即座にあげられる。しかし教え方とは関係なく、勉強すること、

じっとしていること、暗記すること、集中することが嫌いな子供は現実にいるのである。(朝日新聞1991.2.15)

これは、スルト1によって接続された前・後文内容が、時間軸上の特定の位置から離れて(広義)継起性を付与されるため、2つの事象の継起が仮想上の世界において起こる、または一般的・恒常的に現実として起こるものだと捉えられるようになるということである。上の(30)は<一般・恒常>の場合だが、<未実現一回的>な場合もありうる。

(31) もうすぐ寒くなるだろう。すると勇は旅に出るにちがいない。

<反事実>も可能だが、この場合のみ命題部分の述語はタ形をとりうる。

(32) 立ち止まっていたら彩は死んでいただろう。すると勇は悲嘆にくれたにちがいない。

(31)(32)においてスルトの接続対象となっているのは、次の[]内の部分である。前・後文の全体を接続していると解釈される場合は、スルトが次節で述べるスルト2の解釈を受けていることになる。

(31) [もうすぐ寒くなる]だろう。すると [勇は旅に出る] にちがいない。

(32) 立ち止まっていたら [彩は死んでいた] だろう。すると [勇は悲嘆にくれた] にちがいない。

スルト1の条件用法は、実例の出現頻度も非常に低い。したがってスルト1の基本的な機能は、前述のとおり特定の性質を伴った(広義)「継起性」の表示であり、条件用法はここから派生したものであるとしたほうが、その逆の派生関係を想定するよりも妥当である。これは接続助詞〜の歴史的な成立過程とも合致する捉え方である(岡崎1980、小林1996参照)。

3. 4 スルト2

浜田(1991)は、新しい知識と既存の知識の突き合わせによって推論が引き起こされることを示す「デハ系接続語」の一つとして、スルトの使用

条件に論及しているが、これは本稿でいうスルト2である。この論文では、スルトの後続発話としてワケダ・ノダ・トイウコトダを文末に持つ文、(裸の)平叙文、ネ・ダロウなどの判定要求表現が文末にくる文、WH疑問文は適格であるが、意志や命令・依頼の後続発話は不適格であること、またデハのような転換の機能を持たないことが示されている。付け加えれば、ワケダ・ノダなどの説明の形式を持つ文は、Yes-No疑問文・WH疑問文であっても後文として適格であり、判定要求の形式が付加されてもよい。

③ 「だって君、スルメはイカだろう。イカは海の魚だね。すると、つまり、川の魚が海の魚を食うんだね? ……」(開高健「裸の王様」)

④ 「(…)かの有名なアレキサンダァ・グラハム・ベル氏が電話機を発明されたのは今年のことでござる。ベル氏はその後米国より漫遊のため来朝され、電話機はかく日本に伝えられたのじゃが」「へえ。そんなに早く輸入されたとは思いませんでした。すると、最初に電話機を取りつけられたところが宮内省なのですか」(筒井康隆「最初の混線」)

③はノダ+判定要求形式の文、④はノダが介在するYes-No疑問文の例である。また次のようにスルトの直前で話者交替がある場合も多い。

⑤ 「いや、そんなことはありません。衝突したのです」「すると、交通事故ですな。(…)」(星新一「白い記憶」)

スルト2は多くの場合、浜田(1991)のいう「[「新しい情報」を受け取った時に生起する推論に基づく積極的反応]を示す形式であるといえるが、デハについて浜田氏も述べるように、スルトについても、必ずしも先行する情報が新規獲得情報である必要はなく、「新しい前提として推論を導くきっかけとなる」(浜田1991)ものであれば、既得情報の確認でもよい。

⑥ 前にも言ったが、私の母は1930年生まれだ。|a.*それなら/b.すると/c.だから|敗戦の時には15歳だったわけだ。

前述のように、スルト2は森田(1980)の「假定条件」のスルトに相当するが、上記の点から見ても、スルト2で接続された2文間に「假定条件」という用語が表す関係があるとはいえないわけである。

以上から、スルト2の機能は、前文内容の認識・判断を基盤として後文の判断または疑いが形成されることを表示するものであるとすることができ。したがって、命題内容間の「継起性」を表示するスルト1とは異なる接続レベルに属するとしなければならない。ただし、両者の機能における共通性は抽出することができる。「事象または思考内容の展開(段階の進展)を表示する」といったものである。

4. 現代日本語接続詞の接続レベルについて

上述のとおり、スルトの2用法、すなわちスルト1とスルト2は、レベルの異なる接続機能を持っていると考えられる。この接続レベルの違いという観点は、スルトに限らず現代日本語接続詞一般に対して適用できるものと思われる。蓮沼(1991)は、接続詞ダカラの用法を対話型と独話型に分け、独話型のダカラが表示する関係づけに<原因と結果><根拠と判断><発話の理由と発話行為>の3つの階層的なタイプがあるとしている。

(37) 彼はまだ寝ている。だから部屋のカーテンはしまったままである。

<原因と結果>

(38) 部屋のカーテンがしまったままである。だから、彼はまだ寝ているのだろう。

<根拠と判断>

(39) 遅刻しますよ。だから早くおきなさい。<発話の理由と発話行為>

(例文(37)~(39)は蓮沼1991より)

ここで、<発話の理由と発話行為>についてはやや問題がある。(39)は間接的発話行為としての前文が、後文の直接的命令に「換言」されていると

したほうが、現実に即した解釈ではないかということである。またダカラは、問いかけをその発話理由と関係づけることができない。

(40) #勇の部屋に明かりがついています。だから勇は家にいるんですか。

したがって、ダカラに〈発話の理由と発話行為〉といった接続レベルを考えるには、いまだ根拠が十分でないといわざるをえない。ただし、ソレカラの用法には〈事象の継起〉と〈発話（想起）の継起〉といった2種の関係表示が存在する（森田1980参照）など、他の接続詞の接続機能には発話に関わるレベルがありうと思われるが、これも未解明の部分が多い。

このように、日本語接続詞の接続レベルをいくつに分けるべきかについてはまだ確定できないが、少なくとも、ダカラの〈原因と結果〉のような命題内容である事象と事象間の関係表示のレベルと、〈根拠と判断〉などのような事象認識・判断・発話ともう一つの判断や発話との関係表示のレベルとは、区別して扱う必要がある。すでに池上（1983）は、日本語接続詞の使用について、「言語表現において表されている外界のレベルにおいて認められる関連性（例えば、時間的な継起や因果関係）をそのまま再現する場合」（「客観的」提示）と「話し手がそれを自らの立場から捉え直し、再構成して（必ずしも外界での順序とは一致しないようなやり方で）提示する場合」（「主観的」操作）があると指摘している。

(41) 雨が降った。だから地面が濡れている。 <「客観的」提示>

(42) 地面が濡れている。だから雨が降ったのだらう。 <「主観的」操作>

(例文(41)(42)は池上1983より)

英語接続詞については、Halliday & Hasan (1976)、van Dijk (1977, 1979)、などは2つ、Schiffrin (1987)、Sweetser (1990)などは3つの接続レベルを認定している。前述のとおり、日本語接続詞についても3つの接続レベルを認定できる可能性があるが、当面はスルトの用法・機能分析に直接関わる〈命題レベルの接続〉と〈判断・発話レベルの接続〉の2

つを認定しておくこととし、これらを次のように規定する。

- (43) a. 命題レベルの接続：接続詞が命題内容間の関係を表示する接続。
- b. 判断・発話レベルの接続：接続詞が言語表現発信者による判断・文（文連鎖）発話の相互間における関係を表示する接続。

スルトに関しては、すでに述べたとおり、スルト1が命題内容である事象間に（広義）継起という関係を表示する命題レベルの接続を行い、スルト2が前文の認識・判断を基盤として後文の判断が成立する関係を表示する判断・発話レベルの接続を行うものである。

5. まとめ

以上、論じてきたように、スルトには、基本的にダトスルトに置換不可能なスルト1と、置換可能なスルト2がある。スルト1は、前・後文の命題内容を「認知的不確定性」「同一場面性」という性質を伴った（広義）「継起性」において関係づける機能を持ち、＜命題レベル＞の接続を行う。前・後文の命題部分が非過去形の場合、および反事実を表す場合は、前・後文命題内容の関係が条件化する。スルト2は、前文の事象認識・判断を基盤として後文の判断・疑いが成立するという関係を表示する機能を持ち、＜判断・発話レベル＞の接続を行う。

＜命題レベル＞＜判断・発話レベル＞という2つの接続レベルは、日本語接続詞に一般的に適用できる概念である可能性がある。判断レベルと発話レベルの分離も必要とされる可能性があるが、これは他のさまざまな個別接続詞の用法・機能分析を通じて、今後追求すべき課題としたい。

注

- 1) 各例文の適格性判断については、大阪大学文学部において日本語学を専攻する学部生・大学院生、計20名を対象とする調査を行って確認した。

参考文献

- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』(日本語教育指導参考書11) 国立国語研究所
- 岡崎正繼 (1980) 「順態接続助詞「と」の成立について」『國學院雑誌』 國學院大学
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 小林賢次 (1996) 『日本語条件表現史の研究』 ひつじ書房
- 佐治圭三 (1970) 「接続詞の分類」『月刊文法』 2-12 明治書院
- 鈴木一彦・林巨樹 編 (1984) 『研究資料日本文法 4 修飾句 独立句編』 明治書院
- 鈴木義和 (1986) 「接続助詞「と」の用法と意味」『国文論叢』 13 神戸大学文学部国語国文学会
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能—」 鈴木一彦・林巨樹 編 (1984) 所収
- 豊田豊子 (1978) 「発見の「と」」『日本語教育』 36 日本語教育学会
- 蓮沼昭子 (1991) 「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部 紀要』 4 姫路獨協大学外国語学部
- (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」 益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』 くろしお出版
- 浜田麻里 (1991) 「「デハ」の機能—推論と接続語—」『阪大日本語研究』 3 大阪大学文学部日本学科 (言語系)
- 前田直子 (1996) 「日本語複文の記述的研究—論理文を中心に—」(大阪大学大学院博士論文)
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』 角川書店
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. Longman
- Hasegawa, Yuko. 1996. The (nonvacuous) semantics of TE-linkage in Japanese. *Journal of pragmatics* 25
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse markers*. Cambridge University Press
- Sweetser, Eve. 1990. *From etymology to pragmatics: metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge University Press

van Dijk, Teun A. 1977. *Text and context: exprolations in the semantics and pragmatics of discourse*. Longman

——— 1979. Pragmatic connectives. *Journal of Pragmatics* 3

(大学院後期課程学生)